



第19回マネジメントセミナー 「チーム力とは何か」

～ミュンヘンの金メダルから北京復帰まで～



(平成20年11月20日(休)於：ロイヤルホールヨコハマ)

マネジメントセミナーは、幅広いテーマで会員に止まらず、非会員の方へも広く情報提供することを狙いとしてスタートし、今回で19回目を迎えた。今回のテーマは、「チーム力とは何か」～ミュンヘンの金メダルから北京復帰まで～。バレーボール界で選手・監督として活躍したミュンヘンオリンピック・バレーボール金メダリストの嶋岡健治氏をお招きしご講演戴いた。

嶋岡氏は、高校3年の時に全日本入りし、メキシコオリンピックで銀メダルを獲得、その後日本鋼管(NKK)へ入社し、その年のミュンヘンオリンピックで金メダルを獲得した。その後のオリンピックや世界選手権でも活躍した後、昭和56年からNKKで監督、総監督を歴任。現在はJFE継手(株)で取締役(営業部門担当)としてご活躍されている。

冒頭、ミュンヘンオリンピックでの準決勝・決勝の映像を10分放映し講演をスタートした。講演中には、お持ち戴いた金メダルを会場内で回し、手にとってご覧戴いた。以下その発言要旨。

「監督は、コックと一緒」

監督は、チーム全体を見渡し、足りないものを限られた選手の中でどう補うかを考える。今ある限りある材料で最適の料理を考えるコックと同じ。

「一人一人に仕事を与える」

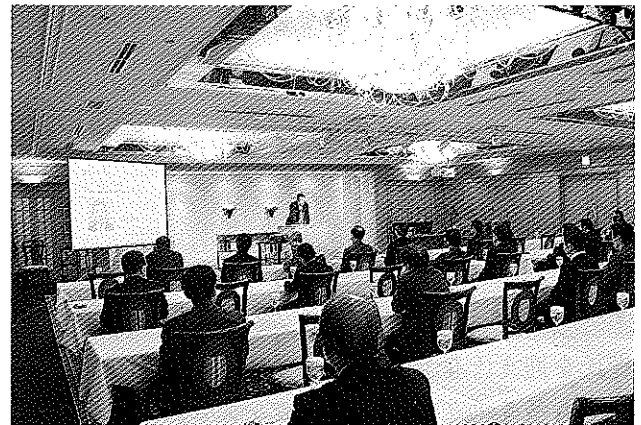
タイム(休憩時間)の時、試合に出ている選手に汗拭きタオルを渡す役の選手がいる。そのような選手へも、相手チームにも同じ役の選手がいるので、その選手と見比べて競うようにと仕事を与えた。期待と果たすべき役割意識(チームの一員)。

「監督とキャプテンの以心伝心」

当時のバレーは、15点制。10～15点の大事なときにタイムを取れない時もある。そういう時の為にキャプテンには、監督の表情で気持ちが分かるようにと日頃からしっかり気持ちを伝えた。

「約束は、全員で守る」

勝っている時は良いが、負けが込んでくると不協和音となる。その時の結束力が一番問題。



「監督の役目」

監督の役割は、常に選手がいい気分で試合を迎えられるように、如何にそういう状態を作るか。

「チームワークとは」

自分のやらなければいけない事を100%やる。自分の持っている力を100%出すことは義務であり役目。全員がそうすることがチームワーク。誰かが手抜きをすると負ける。

「負けてたまるか！」

松平監督が良く言っていた言葉。人間はとても弱い。自分に対し負けてたまるかということ。

「我慢の大切さ」

早く結果を出したがるのを我慢させること。

「メキシコでの経験」

高校時代にメキシコオリンピックに出場し「試合ではミスをするとうける」ということを学んだ。ミュンヘンの準決勝では、1・2セットを連取され、絶体絶命のピンチ。でもメキシコの敗戦から4年間、一生懸命練習してきて「ここで負けるのはイヤダ」という気持ちとなり逆転勝利した。

嶋岡氏は、金メダルを取れた理由を振り返り、「良いメンバーに恵まれた」ことを挙げる。ミュンヘンの後のモントリオールオリンピックでは、ある試合を2点で落とし、結局4位となった。勝者と敗者の差はちょっとした所。勝負の世界で凌ぎを削り、生きてきた嶋岡氏の話には、説得力があり、会社組織の管理や運営にも当てはまり、大変興味深かった。